

実習報告（異校種実習）

幼児期の遊びにおける学びとは —二人称的かかわりで観察することを通して—

嶋田 恭子（授業実践探究コース）

【探究実習のテーマと設定の理由】

小学校学習指導要領（平成29年告示）において、一人一人の児童が豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となるよう、学校教育では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して生きる力を育むことが求められている（文部科学省2017:17）。また、中央教育審議会答申（平成28年12月）では、主体的・対話的で深い学びの実現について、「人間の生涯にわたって続く『学び』という営みの本質を捉えること」や「子供たちに求められている資質・能力を育む学びの在り方を考えること」の必要性が述べられている（中央教育審議会2016:49）。そこで、2年次に小学校生活科で授業実践研究を行うにあたり、探究実習では『学び』の営みの本質を捉えることに焦点を当てる。

小学校学習指導要領解説生活編（平成20年告示）において、初めてスタートカリキュラムについて示され、小学校学習指導要領（平成29年告示）の改訂では、低学年の各教科等でも幼児教育との関連について明記された。さらに、2018年度には、幼児教育に関する法令に「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が示された。この一連の改訂は、幼小の接続の重要性が高まっていることを示している。しかし、幼児教育と小学校教育の教育課程は、内容や進め方が大きく異なり、小1プロブレムとしても問題視されているように、その接続は容易ではない。幼小の接続に関して、佐伯は、「幼児段階というのは、小学校段階の準備教育という意識が最近ますます強くなってきているが、そういうふうに捉えてしまうのではなくて、むしろ人間としての学びということを中心に考えながら、幼児教育を考える必要がある。」（田中/佐伯/佐藤2005:111-112）と述べている。つまり、小学校教育での授業開発を進めていく際も、学びを幼児期からのつながりのあるものとして捉えることが大切なのではないだろうか。よって、幼児期の学びを理解することは、学びの本質を捉えることでもあると考える。

以上のことより、小学校入学前の幼児期の子供たちの遊びの姿から学びとは何かについて明らかにしていく。しかし、遊びは無自覚的な状態で行われるため、特に幼児期の段階では自分の思いを自覚的に言葉で表現するとは限らない。そこで、幼児期の子供の学びを捉える視点として、佐伯の「ドーナツ論」に依拠し、遊びの事実を二人称的かかわりで観察していく。佐伯は、二人称的かかわりについて、「特定の相手とかかわるとき、相手の立場、状況、これまでの経緯などを踏まえて、相手に『なっ』、こちらに向けて訴えていることに聴き入り、その訴えに応えようとしてかかわること」（佐伯2017:69）と定義している。つまり、二人称的かかわりは、幼児期の子供が何を見ているのか、なぜそのような行動を起こしているのかなど、子供の思いや願いを読み解く手がかりとなると考える。

このように、幼児期の子供の遊びの実態を考察し、学びについて追究することで、幼児期から児童期へと円滑な移行が可能になる新たな教育実践を切り拓くと考え、本探究実習のテーマを設定した。

【探究実習の研究目標】

- ① 幼児期の子供の遊びのもつ意義について考察する。
- ② 幼児期と児童期の学びの関連について探る。
- ③ 幼児期の子供に対する保育者の関わりについて調査・分析する。

【探究実習の概要】

4歳児クラスで20日間の実習（2021年9月1日から11月2日）を行った。その中で、関与観察を実施し、鯨岡が「心を動かされるエピソードとその背景，メタ観察したものの3点を提示した記録方法」（鯨岡2005：130）と定義するエピソード記述で記録した。さらに、佐伯の「ドーナツ論」を援用し、関与観察やエピソード記述を通して、幼児期の子供の遊びの意義や学びについての分析を行った。

【探究実習の成果と課題】

探究実習の成果として、二人称的かかわりで関与観察やエピソード記述で記録を続けていくことで、切り取った場面だけでは見えない子供たちの思いや願いを理解することにつながった。

幼児期の子供たちは、身近なヒト・モノ・コトと繰り返し関わる中で、その面白さを見出し、遊びに没頭していた。さらに、遊びの内容を見ると、工夫する、他者と協力する、友達と折り合いをつける、予想する、自然と関わる、季節の変化に気付く、数や文字を使う、言葉で思いを伝え合う、表現することを楽しむ姿があった。このように、幼児期の子供は、遊びの中で様々なことを味わい、感じ、新たな思いや願いをもつことが分かった。ゆえに、幼児期の学びとは、ヒト・モノ・コトとの応答を繰り返し、その対象とのよりよい関わり方を見つけようとしている遊び自体が学びであると考えられる。

また、思いや願いを実現しようと進んで活動する姿から、幼児期の子供は、身近な環境との応答関係の中で、自分のもっている力を発揮しようとしていることが分かった。このように、思いや願いをきっかけに主体的に取り組もうとする姿は、児童期につながる学びの姿として捉えることができる。

保育者の幼児への関わりについては、「判断するのは子供」というキーワードが挙げられる。実際に、子供自らやりたいことを決めて、試行や思い通りにならないことを繰り返しながら思いや願いを実現しようとする姿があった。このように、遊びを展開していく背景には、子供の思いや願いを感じ取ることができる保育者の存在も、子供の身近な環境の一つとして大切な役割を果たしていると考えられる。

課題としては、ここで明らかになった幼児期の学びを踏まえ、小学校教育における具体的な授業として検討することである。また、探究実習では、幼稚園教育と小学校教育とで教師の関わりの違いを大きく感じた。その違いが、子供たちに混乱を招き、小1プロブレムに表されるような幼稚園教育と小学校教育のギャップを生み出す一因となっているのではないだろうかとも考える。そこで、2年次では、二人称的かかわりの視点を生かして、新たな教育実践の在り方を明らかにしていきたい。

引用・参考文献

- ・ヴァスデヴィ・レディ（2015）『驚くべき乳児の心の世界—「二人称的アプローチ」から見えてくること』（佐伯胖：訳）ミネルヴァ書房。
- ・鯨岡峻（2005）『エピソード記述入門 実践と質的研究のために』東京大学出版会。
- ・佐伯胖（2017）『「子どもがケアする世界」をケアする 保育における「二人称的アプローチ」入門』ミネルヴァ書房。
- ・田中俊也/佐伯胖/佐藤学（2005）「学び・遊びと教育」教育科学セミナー36：109-119。
- ・文部科学省（2008）『小学校学習指導要領（平成20年告示）解説 生活編』東洋館出版。
- ・文部科学省（2017）『小学校学習指導要領（平成29年告示）』東洋館出版。
- ・中央教育審議会（2016）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm（最終閲覧日2022年1月24日）